

## 5章 著書の秘密

### (1)

「大前よお、則尾のやつ、どうなってるんだ!？」

手塚部長は月曜の朝から苛立いらだっていた。

「オレも心配してるんですけど、こちらからの連絡が取れないものですから」

「札幌の支店長にもう一度頼んでみるよ」

「そのつもりです。このあと連絡を入れようと思っています」

「あいつ、今月中に3つの紀行文なんて書けるのか? あと一週間しかねえのにさ。もしこの企画が滑ったら大前の課も危ねえぞ。よくて団体旅行企画との統合、悪く転べば廃止って可能性もある。それに媒体編集部だって縮小ってことになるかもしれねえしな」

手塚はいっぴく深刻な面持ちで、小さな吐息をもらした。

フルムーン旅行のパンフレットは、従来のバック旅行用と比べて十倍以上のページ数が予定されている。商品パンフは営業販売の支援ツールであり、それ自体での採算性は問われないが、今回の場合、紀行文やそれに関連する写真などを含め、小規模なガイドブックに匹敵する予算を要する。編集媒体部では、編集制作にかかるソフト部分の予算をJR各社や旅行関連グッズメーカー、さらにはプラン中で選択させる宿泊施設やオプション関連などの広告収益で賄まかう計画である。本来ならば首都圏に配布する約五千部の印刷費もスポンサーに依存したいところだが、昨今の経済情勢では編集制作費を得るのが限界で、印刷費はフルムーン企画の営業利益に頼らざるを得ない。

当初、広報宣伝計画の目玉だったテレビ局とのタイアップ計画も、低迷する経済情勢の影響でメインのスポンサー確保が難航し、保留の状態である。最後の頼みは雑誌社である。そのため手塚は、営業部長や国内旅行企画部長などと連日のように雑誌社へ出向き、タイアップ企画やパブリシティ掲載の交渉に汗を流しているようである。

問題はそれだけではない。米国のリーマンショックに端を発した金融不安は世界的な経済不況を巻き起こし、この夏以降の海外旅行需要も、かつてないほど深刻な状況が予想されている。頼みの綱は経済発展著しい中国からのインバウンド需要であるが、それなども国内旅行代理店各社はもとより、現地中国の旅行代理店との熾烈な争奪戦せきりつせんに晒さらされ、なかなか思うような成果はあがらない。

そんな渦中であって今回のフルムーン企画は、いわゆる勝ち組と呼ばれる熟高年層の新たな国内旅行需要を発掘し、独占できる可能性を秘めた企画であり、商品単体の収益性も、薄利多売合戦にしのぎを削るバック旅行とは比較にならないほど高い。つまり今回の企画は下半期の戦略商品というだけでなく、次年度の企業経営さえも左右する重要なエレメントなのである。部長から『深慮なき結果オーライ』『若天性アルツハイマー』などと陰口をたたかれる手塚ではあるが、経営にタッチする立場からすれば、商品の売上に大きく影響する紀行文への想いは、期待というレベルを超え、神だのみに近いものがあるのだろう。

「すぐに札幌支店に連絡を入れます! あとは任せてください!」

はげ口のないストレスに懊悩する手塚を、雅人は精一杯の明るさで励ました。

札幌支店長から報告があったのは、課員がぼちぼちと帰り支度をはじめると夕刻だった。

——いやあ、則尾さんの体力はたいしたもんですね。

開口一番、菅原支店長は則尾の回復ぶりに感嘆した。

「退院の目安はどうでした？」

——本人は明日にでも退院したいと言ってました。あとは医者<sup>イサ</sup>の判断ですわ。

「紀行文については？」

——心配ないと言っていました。大前さんにもそう伝えるようにということです。

《心配ないっていいってもなあ》

手塚部長の心痛だけではない。自社の経営内情を知っている雅人自身の意識にも、先行きへの不安が慢性的な痛みとなつて滞<sup>おどろ</sup>っている。

ふいに七海の顔が浮かんだ。

もし七海と深い関係になり、そのままSTBへ転職したら……先週の土曜日、自宅へ帰る総武線のなかで考えた正当化の理由のひとつであるが、それは宝クジを買うときの、当たりの予感にも等しい大いなる夢想のような気もする。

そう考えると、3大秘湖プランで行った北海道下見から二カ月足らず、突如として身に迫った非日常的な出来事に慢性化した日常から脱する夢想を抱いたのも一時の錯覚<sup>ごっご</sup>ではないのかと、恐怖感にも似た自嘲さえ湧いてくる。ただ、南国の花を彷彿とさせる七海の香りだけが、奇妙なりアル感で意識にへばりつき、雅人を非日常の世界へと誘っている。

「課長、お先に！」

突然、鼓膜を殴りつけるような声がして雅人は椅子から転げ落ちそうになった。背後から忍び寄った美悠が、いつもの『茶目つけ攻撃』を仕掛けたようである。

「な、なんだよ！」

「やだあ本気でビビってる！」

美悠は小バカにしたような上目で雅人を見た。

「いい加減にしろよ！」

「課長、なにを考えていたんですか？」

「べつになにも考えちゃいないよ」

「嘘ばかり、則尾さんのことでしょうか？ 午前中も手塚部長からさんざんいわれたんでしよう？ でも、それっておかしいですよ。則尾さんを抜擢したのは媒体編集部ですよ。

それにパンフレットの制作や広告営業なんか、ウチの課と直接関係ない仕事じゃないですか。それなのに課長が編集会議や広告営業に引っぱりまわされるなんて変ですよ」

「この企画はウチの課が中心になって進めているんだからしょうがないさ」

美悠はフーンと不満そうにうなずき、

「話は変わりますが、あの件、どうになりました？」

「あの件って？」

「シノウミニコイですよ。カシオペアの」

「ミュウちゃん、それはこれだよ」

雅人は慌てて口にチャックをするポーズで警告した。

「そっか……」

彼女はおそおそと室内を見まわした。すでに大半の課員は帰宅し、課内には二人の残業組みしかいない。その二人も早く仕事を終わらせようとパソコン作業に没頭している。

それを確認した美悠は、近くのイスを雅人のデスクに引き寄せ、ちよこんと座った。

「あれから私も調べてみたんですけど、あのダイイングメ……じゃなくて、あの言葉って、もしかしたら公害や自然破壊に関係あるんじゃないですか？ だってカシオペ……じゃない、あの路線の出発地は北海道ですよ。それに例の女性が興味をもっていたのは3大秘湖でしょう？ 3大秘湖といえば、自然環境保全の代表格のイメージがあるじゃないですか。あのとき課長がいったことはけっこういい線をついていたと思うんです。それに今回のあれも札幌でしょう？ 両方とも四季観光産業がらみだし、もつといえればSTBがらみですよ。だから、北海道の環境破壊問題に関係した事件だと思うんです」

「へえ、そんなこと考えていたの？」

「私が思うにあの議員と官僚の二人が怪しいんです。ネットで調べたら、あの二人は現役時代、北海道の農業行政や開発行政のリーダー的な存在だったようです。そのころ北海道の環境破壊に関するなにかを仕掛けたんじゃないでしょうか？ たとえば四季観光産業の北海道開発に特別な便宜を図る不正のようなもの……3大秘湖を埋め立てて大規模農地を開発するような、そんな政官財が癒着した利権供与みたいなことです」

「3大秘湖は国立公園内だよ。そんな利権は法律違反だし、もしそんなことがあれば環境保護団体だって黙っちゃあいないさ」

「だからあー！」

美悠はくつきりした目を丸くし、焦れたようにいった。

「あんなことになったんですよ。自然保護活動はある意味で反体制運動じゃないですか」「そりゃあ偏見だ。ミュウちゃんだってこの業界にいるんだから、環境保護問題への造詣は一般人より深いはずだろう？ 自然保護団体が設立された初期に、純粋な自然保護運動に転進した左翼団体があったから、そんな偏見的なイメージが生まれたんだよ」

「そのことは知ってます。だから国内の話じゃなくて海外の話ですよ。あの女性だって米国籍でしょう？ 上野の管轄の話では、名刺にあったファンドは存在しないし、女性の身分も怪しいってことでしたけど、外国籍であることは間違いないと思うんです」

「海外ねえ」

「課長、グリーンピースって知ってます？」

「知ってるさ。えんどう豆だろう？ ご飯に炊き込むと旨いんだ、これが」

「真面目に話してるんですか！」

美悠は心外といわんばかりに雅人を睨んだ。

「冗談だよ。世界的なNGO組織で自然保護団体の名前だろう？ 日本の捕鯨に反対して、けっこう過激な行動を取っているしね」

「それじゃあ、グリーンピースに関するFBIの資料って知ってますか？」

「FBI？ アメリカのFBIか？」

「そうですよ。Federal Bureau of Investigationの略、つまり米国連邦捜査局のことです」

さすがに英文科の出身だけあってネイティブのように流暢な発音である。

「ミュウちゃん、英語の発音はさすがだね」

「そんなことよりFBI資料のことはどうなんですか？」

「そんなの知らないよ」

「私も今回のことで調べたんですけど、二〇〇五年に米国のACLU、つまりAmerican Civil Liberties Unionっていうアメリカ自由人協会が、米国の情報公開法に基づいて入手したFBI資料で、グリーンピースがFBIから国内テロリズムの団体として監視されている団体だってわかったんですよ」

「テロリズム団体？」

「そうですね。あくまで監視対象の団体ってことですけど……ほら、何年前、青森県でも事件があったじゃないですか。捕鯨問題を告発するグリーンピースが組織的に運送会社の倉庫から鯨肉の宅配物を窃盗したって事件、覚えてませんか？」

「そんなニュースを見た記憶はあるけど……」

「ネットの情報では、この事件の捜査や逮捕には青森県警だけじゃなくて警視庁の公安部が関わっていたらしいんです。ということは日本国内でも公安当局の監視対象になっているってことですよ」

「ミュウちゃん、よくまあ……」

雅人は心底感心した。美悠の推理に、福田のCIA説に劣らない説得力を感じたからである。

《CIA、FBI、警視庁公安部か……》

3つのワードを思い描いていると、美悠が雅人に顔を近づけた。

「本当に重要なのはここからなんですけど、そのグリーンピースの資金は……」

「ミュウちゃん、ちよつと待て。夕飯をおこるから、そこでゆっくり聞かせてくれない？」

とたんに美悠の顔が上気する。

「マジですかあ！ やったあ！ またドームホテルのレストランですか？」

「巨人戦のナイターがあるからあの近辺は混んでるぜ」

「残念でした。きょうは月曜だからナイターは休みですよ」

勝ち誇るように美悠は華奢な顎を突き出した。

結局、前回と同じレストランを奮発する羽目になったが、今回は口止め料ではなく講演料である。美悠もそれを意識してか、メニューの最上部に誇らしく記されたファイル肉のプロバンス風ソテーのディナーコースを、さも当然といった顔で注文した。

《調子に乗るなよ！》

やや癪しやうに障ったが、料理を味わいながら聴いた話は、その出費に見合うどころか、お釣りがくるような内容だった。

「これは私が調べた資料からの内容ですけど……」

彼女はそう前置きして講演を開始した。

それによると、グリーンピースの活動資金は原則として活動を支援する世界の会員・約四百万人からの会費とされている。しかし二〇〇五年、グリーンピースの創設者の一人である環境学者のパトリック・ムーア博士が来日した折、そのシンポジウムで資金源に関する驚くべき発言があった。

その発言とは……設立当初のグリーンピースは会員の会費が主な資金源だったが、そのうちにロックフェラーなど巨大財団から資金を得るようになり、やがて資金源の八割を占めるようになったという報告である。博士自身はすでにグリーンピースの活動からは離れ

ているが、創始者の一人である博士の発言にはかなり信憑性がある。

「だからカシオペア事件の女性の名刺にあったMAファンドっていう怪しいファンド、上野分駐所の警察官も、そんなファンドは存在しないって言ってましたよね。でもグリーンピースの資金源がロックフェラーなどの金持ち財団だとしたら、MAファンドという金融に絡んだ架空の団体名を使ったのも、なんとなく納得できるんです」

そのあと美悠は、「それにしても、あのときの警察官、田所警部っていいましたっけ？ マジでムカつく！」と憎々しげにつけ加えた。

土曜日に城ヶ崎海岸の伊豆海洋公園で見たゲジゲジ眉のギョロ目が思い浮かび、雅人は苦笑いしてしまった。

「なにがおかしいんですか？」

「いやあ、ミユウちゃんの推理力に圧倒されただけだよ」

まんざら嘘ではない。彼女の話には福田の説と天秤の両皿でつり合うほどの重さがある。ただしその重さは、あくまで一般人の推理としての質量であり、MAファンドの実態らしきものや北嶺観光開発に巨額の投資があったというブラックジャーナリズムの情報とは別の次元にある。しかし、この推理は福田や則尾に話してみるだけの価値はあると思った。

満足そうに笑んだ美悠はフイレ肉の最後のひとかけらを頬張り、「それとですね、もうひとつの可能性は……」と口をもごもごさせながら話しはじめた。

第2幕はFBIとCIAに関する講演だった。

FBI（米国連邦捜査局）とは米国司法省下の組織であり、州を越える犯罪や複数州に渡る犯罪の捜査をはじめテロ・誘拐・スパイなど国家に対する重犯罪や連邦職員の犯罪の捜査を担当する機関である。これに対しCIA（アメリカ中央情報局）とは、大統領が直轄する米国の諜報機関であり、米国に関連する情報の収集や分析、さらには米国の利益に根ざした対外工作を遂行する機関である。

2つの組織の概要を話した美悠は、デザートのシャーベットを舌にのせ、さも満足そうに事件の構図を語った。それは次のようなものである。

衆議院議員の亀山と元キャリア官僚の白石は北海道の開発に関して四季観光産業に便宜を図った。しかしそれを阻止しようとした自然保護団体の刺客によって殺害されてしまった。その自然保護団体をテロ組織と位置づける米国政府は、警視庁の公安部からの依頼で実行犯の殲滅を図った。それがオコタンペ湖とカシオペア車内で殺害されたMAファンド調査員の肩書きを持つ人物ということである。

「私がFBIとCIAの違いをいったポイントはここなんですよ。FBIは米国内の重犯罪捜査がメインだから、実行したのは対外工作をするCIAっていう構図なんです」

カシオペア車内で死んだ陳ミラー淑美に関する推理は福田説と対立するが、ここまで事件の構図を描いた美悠の探究心とクレバーさは感嘆に値する。

「だからですね、『死の海に來い』という言葉は、自然環境破壊の現場に來れば、政官財が癒着した北海道の開発実態がわかるっていう、呪いを込めたメッセージだと思っんです」

「なるほどねえ。たしかに説得力があるな」

「私だってボーっと生きてるわけじゃないんですよ。本当はこんなスリリングなことが大好きなんです。推理小説も読みますし、サスペンスドラマだって見てますよ」

美悠は誇るように笑んだ。それは、課の独身男どもの淡い恋心を一手に引き受けるアイ

ドルとは違う、クレバーな大人の女性の笑みだった。その顔を見ているうちに、七海が伊豆行きの車中でいった『大切にしておいてあげてくださいね』という言葉がよみがえった。

《彼女はこういう意味でいったのだろうか？》

漠然とした疑問とともに、南国の花の香りが鼻腔の奥をくすぐった。

そのとき、雅人の妄想を見透かしたように美悠が聞いてきた。

「竹崎先輩からの連絡はないんですか？」

「え！？ どうして？」

面食らって頓珍漢な応えをした雅人に、美悠は「もう〜」と呆れ、

「プライベートナンバーを交換した仲でしょう！」

「な、なにいつてるんだよ……そんなたいした問題じゃないよ」

「どうしてそんなに取り乱しているんですか？」

「取り乱してなんかいないよ。急に聞かれたから驚いただけさ」

「連絡はしてないんですか？」

「札幌の事件のときに報せを受けたけど、そのときに話したぐらいかな……」

栗色の瞳に嘘を読まれてしまいそうな気がした雅人は、美悠の視線を避け、デミタスカップの底に残っていたコーヒーをぐっと飲み干した。

「竹崎先輩、事件のことはどういったんですか？」

「どうって……お姉さんのことを心配していたけどね」

「それだけですか？ 私、もともとまめに連絡しているのかと思った。課長はあまり積極的じゃあないんですね」

「どうして積極的に連絡しなけりやならないんだ。相手はライバル会社の役員だぜ。それに……竹崎さんってけっこう謎めいた部分があるだろう？ それほど話したわけじゃあないけど、よくわからないっていうのが正直なところさ」

雅人の抗弁をフーンと聞き流した美悠は、ふいに暗澹とした表情でうつむいた。

「課長は感じているんですね……」

「え！ なにを？」

「竹崎先輩のことですよ。こんなこというと誤解されそうでいやなだけ……竹崎先輩ってたしかに危険な部分があるかもしれませんが。危険というより、見えない暗部があるってどうか、私がSTBへの誘いを断ったのも竹崎先輩のそういった暗部に不信感があったからなんです。なんだか怖いような気がして……」

「怖いか……」

美悠の表現が妙にしっくりと七海の輪郭に重なる。それは七海自身への怖さではなく、そこへ傾倒する自分自身の、先が見えない未来への怖さだった。

その夜、裸になってユニットバスに入ろうとしたときテーブルの携帯電話が鳴った。雅人は腰にバスタオルを巻いたまま携帯電話を取った。

《則尾さん！》

慌てて通話ボタンを押すと、雅人の狼狽を嘲るようにひょうひょうとした声があった。

——いやあ、わるいわるい。きょうの午後、菅原支店長にも伝えておいたけど、聞いた？

「則尾さん、そんな呑気なこといつてる場合じゃないですよ！」

——べつに呑気でもないよ。

「連絡がないってのは困ります」

——好きでこうなったわけじゃないんだから、あまり責めないでくれよ。この電話だって、痛む体にムチ打って、病院の外へ出て、かけてるんだからね。

「本当に困っているのは、オレよりも手塚部長ですよ」

——あいつにも心配かけたけど、さつき退院の許可が出た。明日の夜には東京へ戻るよ。「紀行文は締め切りに間に合うんですか？」

——任せておけ。ストーリーの構成はほとんどできてるから一週間で仕上げよ。

「期待してますよ。それと手塚部長にも連絡を入れておいてくださいね」

——このあと入れるよ。ところでこの土日に伊豆へ行った？

「行きましたよ」

——手塚と？

「いえ……」

——単独で！？

「いえ……」

——もしかして、竹崎社長の妹とランデブーか？

「ええ、まあ……」

——なんだよ、ボクの忠告は無視かあ。

「彼女がどうしてもつていうもんですから、断る理由もないし」

則尾は『はあく』とわざとらしい溜息をついた。

——今さら責めてもしょうがないし、こうして話しているのは無事な証拠だし、まあいいや。それで現地はどうだった？

「青椿堂は単なるトイレで、変わったところはありませんでした。でもトイレを出たところ警察から職務質問されました。上野分駐所の警部もあそこを監視していたみたいです」

——やっぱり警察も感づいてたか。それで警察の様子はどうだった？

「警察では札幌の事件と関連づけて、事件があった日から一週間近く張り込んでいたようですけど、成果はないみたいです」

——ということは、篠海のアナグラムは的外れだったのかなあ……まあ、詳しいことは戻ってから聞くとよ。

「福田さんはどうしてるんですか？」

——たまに病院へ顔を出すよ。忙しく動いているようだけど、いろいろと面白い報告も受けている。きょうも面会時間ぎりぎりに来たんだ。ボクの退院許可を知って、あした一緒に戻ることになったから、あさってぐらいに福田の事務所へ集合しようか？

「紀行文は大丈夫なんですか？」

——だからあ、あしたからきつちり一週間で書くって。

「今回の企画には社運がかかっているんです。だから手塚部長のストレスもすごくて、死にそうですよ」

——わかったわかった、あいつの面目を躍如する紀行文を書くよ。とにかく、このあと手塚にも連絡を入れておくからね。

則尾は逃げるように電話を切った。

翌々日の夜、雅人は錦糸町駅で下車し、福田の事務所に向かった。

前夜、錦糸町への召集を促す電話で、則尾は思わせぶりなことをいった

——福田が面白いものを手に入れたんだ。一気に核心に迫れるかもしれない発見だよ。それにさあ、ボクとしても札幌の事件にはちよつと引つかかることがあるんだ。

その撒餌まきえに嵌められたわけではないが、仕事を気にかけてながら福田の事務所へ向かう足は重かった。

錦糸町の裏小路には、飲み屋や風俗店の原色のサインが怪しくひしめき、演歌からポップスまでごちゃ混ぜにした音が奇妙な和音を奏でている。そこを黙々と歩いていくうちに、まるで御伽話の世界を彷徨っているような気分がして、雅人は鼻で吐息しながら空を見上げた。ネオンの光彩のはるか上空にある偏狭な六月の空は、暮れ切れないジレンマに鬱々と悶もだえているように見えた。

十日ぶりに逢った則尾は哀れな姿だった。ギブスが取れていないため、左腕を胸に固定したまま大きなTシャツで胸元をおおっている。

「則尾さん、それでパソコンが打てるんですか？」

「腕の固定は外へ出るときだけさ」

平然という則尾を、福田がジロつと睨んだ。

「大前くん、こいつは入院中、風呂にも入れなかったんだ。だから飛行機のなかでも臭くてな。夕べ、俺が会員になっているスパへ連れて行ってアカスリを頼んだ。といってもギブス以外のカラダと頭を洗う程度だけだな。そのおかげで多少人間らしくなった」

福田は北海道のときのカジュアルな服装とは打って変わり、ライトグレーのサマージャケットに紺のストライプがはいったワイシャツを着ていた。浅黒く日焼けした顔が北海道の大地を駆けまわったことを物語っている。

「それじゃあはじめようか」

福田は野性味が増した顔に笑みを浮かべ、ぽんと膝をたたいた。

「まずは大前くんから伊豆の報告をしてくれないか」

雅人は促されるままに城ヶ島海岸での顛末を語った。ただし七海の部屋へ寄ったことなど彼女に関することは意識的に省いた。

「警察の網になにもかかってないとしたら、篠海の件は諦めたほうがよさそうだな」

ひととおりの話を聞いた則尾は気難しい顔で腕組みをした。

「一緒に行った竹崎さんは、たった一週間程度じゃあ結論は出ないといっていましたし、オレもそう思います」

しかし則尾は「うん」とうなずき、「彼女のことなんだけさあ」と物憂げな表情でつぶやいた。雅人は思わず身構え、思いつく限りのいい訳を用意したが、則尾はいいかけた言葉のみこみ、「あとでもいいか」と勝手に話を引いてしまった。

雅人は七海の話から遠ざけようと美悠の話を持ち出し、先日聞いた彼女の推理を二人に披露した。

「こりゃあすごい！」

福田が大声をあげて感嘆した。



「大前くん、とんでもない部下を持ったな！ 幾つぐらいの女性なんだ？」

「たしか二十六だと思えますけど」

「その年齢でこの推理か。俺のブレインに欲しいぐらいだ」

それを聞いた則尾が待ってましたとばかりに目を輝かせる。

「ミュウちゃんていうんだよ。かわいい娘だぜ」

「へえ、猫みたいだな」

「そうなんだよ。見た目も猫みたいなイメージでさ、ハーフのハイスクール学生って感じ？ ボクがもう少し若かったらアタックするんだけどな」

則尾はにんまりと腕を組んだ。それを見た福田は「ほお」と目を開き、

「気がありそうな口振りだな。いいじゃないか、二十歳の差があるカップルなんてざらにいますぞ」

「年齢差はまだ十八だよ。でも、そういわれればたしかにそうだよな」

「おい、なにを真に受けてるんだ。冗談に決まってるだろう。おまえは怪しげな三十路女をたらし込んでいるのがお似合いだよ」

「ちえ、福田だって奥さんに隠れて適当に遊んでるじゃないか」

「俺のは遊びじゃない。仕事上の情報収集だ」

「じゃあボクのも仕事上のマーケティング、三十路女性の意識調査ってやつさ」

「自己正当化もそこまでいけば表彰もんだ」

中年男の掛け合い漫才にはうんざりしたが、雅人は七海の話から遠ざかったことに胸をなでおろした。ひとしきりバカ話に高じていた福田は、わざとらしい溜息をつくど、ふいに真顔で雅人を見た。

「冗談はさておき、ミュウちゃんとかいう女性の推理、たいしたもんだよ。北海道へ行く前に聞いていたら俺も触手をのばしたかもしれないな」

「行く前ってことは、現地ですごい発見でもあったんですか？」

「すごいかどうかは今後の成り行き次第だが、面白いものを入れた」

福田は足もとのバッグから四六版の本を取り出した。

ハードカバーの表紙には、黒い壁が崩れ落ちるような幾何学模様のデザインがあり、黒ベースの部分に『ドラッカーの限界』という白ヌキ文字の表題がある。表題の脇には『次代の世界市場を制するのは、日本流マネジメント以外にはない』と副題が添えてあった。

「北海道で偶然会ったブラックジャーナリズムの一人が持っていた本だ。自費出版に近い形で千部程度しか発行されていないらしい」

雅人は本の表紙をまじまじと見た。

「著者は四季徹か……四季観光産業となにか関係あるんですか？」  
すると福田は意味ありげに口もとをゆがめた。

「長嶺善季のペンネームだよ」

「え！ あの長嶺会長？」

「そうだ。四季観光産業の会長にして北嶺観光開発の社長、そして拉致事件の渦中にいる長嶺善季さ。出版されたのはドラッカーが亡くなった翌年の二〇〇六年だ」

「ドラッカーって、『マネジメント』っていう本を書いたP.F.ドラッカーのことですか？」

「ほお、よく知っているな。もっとも最近では『もしドラ』とかなんとかいって、ドラッカ

―が話題になつていそうだけれどな」

「それとは関係ないですよ。オレ、大学の現代経営学の講義でマネジメントをテキストに使いましたから……」

P・F・ドラッカーについては雅人も多少の知識はある。二十世紀最高の経営学者・社会思想家と評され、米国政府の特別顧問や米国大手企業の経営コンサルタントを勤め、『マネジメントの父』と呼ばれた学者である。大学時代、雅人も経営学の講義でドラッカーの著書『マネジメント』や『経済人の終わり』などに触れたことがある。最近では、高校野球部の女子マネージャーがドラッカーを読んで野球部の意識改革を進め、甲子園を目指すというストーリーの本が出版され、『もしドラ』現象などという言葉で話題になっている。

「大学の講義で学んだなら、『もしドラ』しか知らない則尾よりはましたな」

福田はにやにやしながら隣の則尾を顎で示し、

「帰りの飛行機で、こいつにこの本の内容を理解させるのには一苦労したよ」

その視線を「へへん」と突っぱねた則尾は、

「でも、『もしドラ』現象を教えたのはボクじゃないか。旅行作家は社会トレンドさえつかんでいれば、小難しい政治経済学的なことなんか知らなくても生きていけるのさ」

「まったく……成績の悪いガキが開き直ったときにいいそうなセリフだな」

辟易へきえきといった福田はテーブルの本を手にとった。

「この本の主題は、さっき大前くんがいった『マネジメント』だよ。長嶺善季はドラッカーのマネジメント理論を徹底的に分析し、ドラッカーの理論は欧米の経営者にしか通用しないと批判している」

雅人の脳裏に大学時代の講義がおぼろによみがえる。

「でもドラッカーは経営学の神サマとかマネジメントの父とかいわれた人でしょう？ それを批判してるんですか？」

「たしかにドラッカーはポストモダンやナレッジなどの原理を最初に示した偉大な思想家であり経済学者だ。しかしこの本では……とつとつり早くいえば、米国を軸とした欧米の経済的なスタンダードは終宴を迎え、日本や中国など東アジア諸国のマネジメント手法が次代のスタンダードになると書いてある。それに、そのための手法としてドラッカーの理論とは違う新たなマネジメント手法も述べられている。どうだい？ 今の米国の経済状況をいい当てていると思わないか？」

「長嶺会長は二〇〇六年の段階でこの状況を予言していたんですか？」

「予言じゃない。従来の経済学や社会現象を冷徹に分析した結論だ」

毅然といった福田はすぐに思わせぶりの表情で雅人を睨み、

「ちよつと難解な内容だが、この本のポイントを聞きたいか？」

「もちろんです！」

「よし、それじゃあ飯でも食いながらやろう。則尾もこの機会に復習しろよ」

福田は本をぱたんと閉じた。

案内されたのは高級そうな割烹料理店だった。個室を取った福田はビールで喉を潤し、おもむろに話しはじめた。

「まず、この本のすごいところは、ドラッカーのマネジメントの項目すべてに関して、独

自の視点から精緻な批評を行っている点だ。それから……目次を見ればわかるが、厳しく批評した部分には、ケーススタディとして実際の経済界で生じた現象を例にして、わかりやすく解説している。まあ……高校生に理解できるかどうかは疑問だが、ちよつとレベルが高い大学生なら、たとえマネジメントを読んだことがなくても大方の内容が理解できるように書いてある。それと各項目の正当性や論理的な瑕疵もわかるようになっていゝ  
雅人は目次に目を落とした。

通常の目次と違い、それぞれの項目ごとに『ドラッカーは定義に失敗した』とか『肝心なところでドラッカーは原則を踏み外した』とか著者の批評がワンセンテンスで書かれ、ケーススタディのテーマも詳しく書かれている。

「オレ、現代経営学の単位はC判定で、たいした知識はないんですけど……目次を見るだけでも大学の講義内容よりわかりやすく面白そうです」

「だろう？ もしこの本が市販されていたら俺は迷うことなく買うよ」

「でも、どうして長嶺善季はペンネームなんかで自費出版したんですか？ 彼の名前と資本力があれば、市販本としての出版も簡単だって気がするんですけど」

「そのあたりにこの本の謎がありそうな気がするが……とりあえず内容をざっと説明するから、そのあとで考えよう」

そう前置きした福田は、おまかせ料理をつまみながら二十分ほど内容をレクチャーした。そして大方の内容説明が終わると、いかにも疲れた表情で大きく吐息した。

「だいたいはこんなところだが……最後に決定的なことが書かれている。それはドラッカーの限界たる限界、つまりはこの本の表題になっている『限界』という言葉の本質だ」

すぐに神妙な顔に戻った福田は再び話しはじめた。

「これまでの話で各項目の批評もドラッカーの限界を暗示する内容だが、長嶺はこの本の最後で究極ともいふべき2点の限界を述べている。ひとつは『ドラッカーはマネジメントを定義していない』ということだ。これは限界というより、ドラッカーが書いているマネジメントの語彙ごい自体が不明瞭という批判だな」

「それってどういうことですか？」

「大前くんも大学の講義で感じなかったかい？ マネジメントを読んだことがある者ならなんとなく感じていると思うが……」

福田が語ったマネジメントの定義の不明瞭さとは、用法の多様性ということである。つまり、ドラッカーは著書『マネジメント』のなかで、肝心のマネジメントを様々な用法で使用している。あるときは名詞的に、あるときは動詞的に、また、組織の1セクションであるかのように用いたり、手法やノウハウのように述べたり、さらに、マネジメント自体が自立的な意思を持った不可思議な存在のようも表現しているという。

「これは俺も感じていたことだが、辞書的な語彙は別にしても、ドラッカーのマネジメントの用法は非常に多様で、それが『マネジメント』という本の難解さにもつながっているというわけだ。そこで長嶺は最終章で独自にマネジメントの定義を行っている……」

福田はページをめくってその部分を開き、書かれている文字を読み上げた。

「マネジメントとは、社会におけるあらゆる組織の、それぞれの目的を明らかにし、その成果に対して責任を持ったための方法・手法を、すべての組織参加者によって確立することである」

そのあと表情を緩め、

「とまあ、こんな感じだ」

「わかったような、わからないような妙な感じですよ」

「言葉は複雑だが、このなかの『すべての組織参加者』という点が非常に重要で、それが長嶺のいう『ドラッカーの限界』の根源を成しているといってもいいくらいだ。このマネジメント不定義への批判とあわせ、長嶺はドラッカーのマネジメント思想の究極の限界として、大きく2つの点を示唆している……」

福田が語った2点とは、次のようなものだった。

第1点目は、ドラッカーのマネジメント（思想）は、企業の（上級指導層を対象とした）ものであり、末端（パートを含む）従業員から社員に至るまでの全従業員をマネジメントに参加させることを軽視した点。すなわちマネジメント適用者の対象から現場をはずした、非常に限定されたマネジメントであるということ。

そして2点目は、ヨーロッパ・アメリカの歴史的背景をなすキリスト教思想を土台として築き上げられたさまざまな社会的理念に関する思想を『棚上げ』できなかつた点。つまり根深い宗教思想の呪縛じまほくから逃れられなかつたことにあるという。

「長嶺は、この2つの限界を指摘したあと、それを無自覚ながらも突破した唯一の標本が日本だと述べている。それは……」

日本がドラッカーの限界を突破した標本とする理由は2つあるという。

ひとつはマネジメントに『改善』を組み込んだ点である。ことにパート社員を含む全社員が当然のように改善の考えかたを持ち、結果として、それが企業マネジメントに多大な影響をおよぼしたということである。2番目の理由は『棚上げ』『無宗教』という日本人の特質にある。つまり日本は、政治的にはノン・コンセプトであり、見るべき政治戦略はまったくないが、そのことが結果として戦後の経済発展に大きく寄与した。また日本は極めつけの無宗教国だからこそマネジメント適用国として最上の標本になることができたという。

「この点について長嶺は、『日本において思想を語る人間は、人の和を重んじる日本人たちから忌み嫌われる。まったくおかしな国であり、無の国だ』と批評している。さらに、無宗教国という点に関しては、宗教が存在しないのではなく、『なんでもありの状況』だと皮肉っている……」

福田が溜息まじりにいったとき、それまで無言だった則尾が昂然とうなずいた。

「その点はボクも100%賛成だ！ 宗教に対してこんなに無秩序で無関心な国民は天然記念物に指定すべきだよ」

則尾の上気した顔を見て、福田はフンと鼻で笑った。

「まあ、それはそれとして……長嶺の説によれば、日本が無自覚に成し得2つの理由、つまり条件のようなものを忠実に守る限り、人々は豊かさを手に入れられると前置きし、その実証が東南アジア諸国だと論証している」

その論証によれば、東南アジア諸国のなかでも急速な経済発展を遂げた中国は、自らの政権を持つ共産主義思想とは正反対ともいうべき2つの条件を導入し、見事に成果をあげた。しかし中国は、マネジメントの本質を正しく理解したのではなく、日本が無自覚に実践した手法の分析と監査を徹底し、その秘密（2つの理由・条件）に到達した結果であり、

同時に経済分野から政治的思想の規制を外したからであると結ぶ。つまり中国の飛躍を可能にしたのは、マネジメントが正しく適用される状態を創り出したからに他ならないということである。

そこまでレクチャーした福田は、グラスに残っていたビールをひと息に飲み干した。

「ドラッカーの限界という部分の軸はこんなところかな。どうだ、則尾、理解できたか？」  
「まあね。つまり、ドラッカーのマネジメント思想の限界を初めから克服していたのは日本であり、それを真似して克服しつつあるのが中国。でも日本は無自覚に克服していたに過ぎず、単なるラッキーだったってことだろう？」

「そんなところだ。しかし長嶺の論理によると、このままじゃあ日本流マネジメントが世界のスタンダードになるのは難しい。そこで長嶺はこの本の巻末を東アジア連合構想で結んでいる」

そこまでいった福田は、おもむろにビールビンを手にし、空になった雅人のグラスを目で示した。

「どうだ、大前くんは理解できたか？」

「少しは……でも、オレの認識とはまるで違う角度からの内容なので戸惑っています」

雅人のグラスになみなみとビールを注いだ福田は、あふれる泡を慌てて口で受ける雅人を見て、含み笑いをもらした。

「今の太前さんと一緒に、たいていの人は泡を食った状態になる。さもなければ無視するか、そのどちらかだ。ただし、ここまでの内容は俺たちの本題の前哨戦に過ぎない。今回の事件に関する重要な部分は東アジア連合構想にある。この本の最終章では具体的な方法論まで述べられているが……じつは、その方法論が今回の事件のポイントになっている可能性が高いような気がするんだ」

長嶺善季が構想する東アジア連合とは、日本、中国、韓国が軸となり、現在のEU、つまり欧州連合のような連合体を目指すことにある。ただしEUとの決定的な違いは、単に経済的な連合ではなく、政治面も含んだ連合体・東アジア政経ブロック創生の構想である。

その具体的な方法論は、まず日本が十年以上先の政治経済ビジョンを明確に打ち出し、国民的なコンセンサスを築き、その上で米国との関係を『対等関係』にすることである。

ビジョンのヒントは大きく3つあり、まずは『食糧自給率の向上』『農業生産技術への資本投下による高付加価値農業技術と生産品の輸出』、そして『新エネルギーの開発と再生可能エネルギー開発への資本投下』にあると述べる。

現在、世界の先進諸国は、将来の食料確保に向けて発展途上国など他国の土地の購入・借り上げを進め、各国とも百万haを超える面積を確保している。それに比べて日本は、わずかに三十万ha程度にすぎず、かなり遅れをとっている。ところが日本国内には四十万haにおよぶ耕作放棄地や離農地が眠っている。そこで手はじめに第一次産業への資本と技術の投下、なかでも農業の工業化や生産技術の高度化を積極的に推進し、四十万haの耕作放棄地や離農地を再活性化させることの必要性を説き、その技術と高付加価値生産品を持って、海外貿易に打って出るといふビジョンである。

そして、もうひとつは日本が世界に冠たる『省エネルギー技術や再生可能エネルギー技術』への徹底した資本投入と、そこで蓄積した先端技術の海外輸出、そして、バイオエタノールやメタンハイドライドの開発生産、さらには自然エネルギーによる発電など国内で

生産可能な新エネルギーの開発を国家レベルで推し進めるといふビジョンをあげている。

「問題はここからだ。長嶺は、日本国内で蓄積した農業の工業化技術、省エネ技術・再生可能エネルギー技術、さらには新エネルギーの開発生産技術をもって、中国や韓国、さらには北朝鮮、東南アジア諸国との東アジア連合創生を主張している。つまり、連合内の共通通貨と共同軍隊を創り、政治的な自治独立を認めつつ、経済を中心としたひとつのブロックを構成する構想だ。具体的には、食糧生産拠点は中国、食糧備蓄拠点はモンゴル、新エネルギー生産の拠点を北朝鮮としているが、そのための技術と資本を日本と韓国が提供する。つまり、日韓は研究開発の拠点となる。その結果、少なくとも現在の2つの大きな問題が解決する」

福田はここまでいうと唾をぐくりとのみこんだ。

「ひとつはモンゴルだ。今、モンゴルが位置する中央アジア平原の利権をめぐってロシアと中国が対立し、同時にアメリカ政府もこの利権に食い込もうと五十億ドル近い資金を投入している。つまり中央アジア平原は周辺諸国や先進諸国の食いにされるといふ問題がある。しかしモンゴルが東アジア政経ブロックに属する国々の食料備蓄基地になれば、それ以外の大国……早い話がロシアやアメリカだが、それらの大国は手が出せなくなり、外交的な安定と安全が実現し、同時に備蓄基地を維持・運営するための資金が入り、国内雇用も生まれるという筋書きだ。それともうひとつは……」

福田は意味ありげな目つきで則尾と雅人を見た。

「これが重要なんだが……北朝鮮の問題だ。長嶺の論理では、北朝鮮に東アジア政経ブロックのエネルギー生産基地をおくことで、モンゴルの例と同じように産業と雇用が生まれる。その結果、北朝鮮の国民一人あたりのGDPが飛躍的に増加し、それが六千ドル程度になったとき南北統一が可能になると述べてある」

「そこなんだよなあ」

則尾がひょうきんな声をあげた。

「現状のまま統一したら韓国の経済が潰れちゃうもんな。夢物語のようだけど、長嶺の考えには一理あるよ」

『ドラッカーの限界』に書かれた長嶺の論理は、雅人にも漠然とは理解できた。しかし、それと今回の事件との脈絡が定かでない。アルコールも手伝ってか、雅人の脳細胞は霧のような思考のなかで行き惑っていた。

「話が大き過ぎてピンとこないですね」

思わず本音を吐露すると、福田はウンウンとうなずいた。

「ここまで話がでかくなると現実味が薄れるからね。でもな、大前くん、世界の政治経済なんてけっこう幼稚だし、小難しい理論だってみんな後づけのようなものなんだ」

吐き捨てるようにいった福田は、自分のグラスへ乱暴にビールを注いだ。

「福田がいたいなのは、今回の事件の発端は長嶺の理論と方法論に賛同した北条エナジীর会長や、亀山議員、それにキャリア官僚の白石などが行動を起こした。でもそれを面白くないと感じた連中が阻止しようと動いた。そういうことだろうか？」

目を赤くした則尾がだるそうにいった。

「この本の内容から判断する限り、そう考えるのが妥当だな。この点に関しては、大前く

んの部下の女性が推理した構図と同じだ。ただし長嶺たちの行動の起点は、北海道の土地開発ではなく、農業の工業化による耕作放棄地の再活性にある。つまり食糧自給率の向上や新エネルギーの開発を推進する目的だ」

「まずは米国依存体質や、エネルギー・食料品の輸入体質から脱却するってことか」

「そうだ。その先には東アジア政経ブロックの創生がある。しかしこの構想自体が米国政府の機嫌を損ねた。サブプライム問題などで金融依存の経済が総崩れになり、ドルの権威が失墜しそうな米国にとつて、日本の円の力や日米共同の強化は頼みの綱だ。その日本に東アジア政経連合創生への動きがあるのは、まさに言語道断というところだろう。CIAが動いてもおかしくない状況だ。まして…」

そのとき則尾が忍び笑いをはじめた。

「則尾、なにがおかしいんだ？」

しかし則尾は福田を無視し、「こりゃあ、最高だ！ やったなあ！」と大声をあげ、気が狂ったように大口を開けて笑いはじめた。

「こいつ、とうとう狂ったか？」

「最高だ…最高トラップだ…長嶺は、アメリカへの反旗を揚げるため…アメリカの金を騙し取った…そのトラップを仕掛けるために動いたのが、亀山と白石ってわけだ」

則尾は、笑い過ぎて息ができない状態のまま、苦しそうにいった。

「そんなにでかい声を出すな！」

則尾を諫めた福田は、さめた顔で大きく吐息し、

「MAファンドを引き出すために亀山や白石が政官の両面から動いた可能性は高い」

「つてことは、亀山や白石を殺害したのは、やっぱりCIAか？」

笑い涙でぐしょぐしょになった顔をオシボリで拭いながら則尾が聞く。

「おそらくな」

「当然、首謀者の長嶺もターゲットだよな。それも最大のターゲットだ。それで拉致されたって筋書きか？」

しかし福田は「いや…」と顔をしかめた。

「CIAが身代金要求なんてすると思うか？ やつらだったら、すぐに始末するはずだ」

「そうだろうな。でも、この機に乗じて誰かが営利誘拐を企てたつていうのも変な話だし、仮に犯行グループを中国系やロシア系のマフィア組織と仮定しても、筋が通らないよなあ」

「だろう？」

福田が意味ありげな目を向けた瞬間、則尾の顔から笑いが消えた。

「まさか…」

「そのまさかって可能性もある」

「でも、なんのために？」

「そこが問題だ」

雅人は二人の話が見えずに戸惑った。

「二人とも、なにを勝手に納得してるんですか？ オレにもわかるように説明してください」

「」

則尾が困惑した表情を向けた。

「偽装誘拐だよ…」

「え！？ 長嶺会長の誘拐事件のことですか？」

「うん、それが自作自演ってことだ」

「どうしてそんなことする必要があるんですか？」

すると則尾は乾いた笑いを浮かべ、

「ははは、ボクも今、同じ質問をしたじゃないか」

そのとき福田が深刻な面持ちで「考えられることは2つある」とつぶやいた。

雅人は固唾かたずを飲んで福田を凝視した。

「ひとつは危険を感じて身を隠す目的、もうひとつはCIAの動きを牽制けんせいするためだろう。つまり自ら身を隠したついでに誘拐をでっちあげること警察を動かし、結果としてCIAの動きを牽制するという意図だ」

「そんなことをしたって一時的には良くても、その先がないじゃないですか」

「いや、ほとぼりが冷めたころ解放されたと装って出てくればいい。それも狙いのひとつだろう。メディアの後追い報道はおそらく身代金が支払われたという結末になるはずだ。

三十年ぐらい前にも同じような事件があったじゃないか。それに、事件が明るみになれば長嶺にもメディアが殺到する。それはそれでCIAの動きを牽制できる」

「そんなの警察には通用しませんよ」

「適当にあしらっておけばなんとかなる。とにかく今回の誘拐事件は身代金の要求が一度あっただけで、それ以後はまるで動きがない。考えてみれば五十億円なんて途方もない身代金は、たとえ業界大手の企業でもおいそれとは用意できないから、それを計算に入れたうえで偽装誘拐事件と考えたほうが合理的だ」

福田の言葉を継ぐように則尾が悄然といった。

「五十億円なんて要求は前代未聞だよ、それだけの要求金額になると警察も必死で動く。そうなればCIAは動きにくい……そう仮定すればボクの疑問もすつきり解けるんだ」

弾かれたように福田が顔を上げた。

「疑問ってなんだ？」

「竹崎由布子の襲撃事件だよ。長嶺の拉致誘拐が自作自演だとしたら、ボクらを襲った連中の素性だって読めてくるじゃないか」

「ということは、それも……」

「ボクはそう思う」

雅人は、また話が見えなくなった。

「則尾さん、オレにもわかるようにいってください！」

「簡単なことさ、札幌のホテルでの事件も偽装だったことだよ」

「え！？ じゃあ竹崎社長もそれを知っていたってことですか？」

「断定はできない。長嶺も愛人を巻き込まないよう、なにも話してないかもしれないしね」  
しかし福田は毅然と否定した。

「それはない。竹崎由布子が今回の事件の裏を知らないとしたら、あの襲撃事件を演出する意味がない。あれは道警の疑いから目を逸らすための罠わなだ。身代金要求からなにも動きがなく、道警が偽装誘拐の線を疑いはじめたのかもしれない。だからあんな事件を起こして、偽装誘拐を真実らしく演出したのかもしれない」

「ボクがああな襲撃事件に疑問を持ったのは、襲ったやつらのニオイなんだ」



「ニオイ？」

「暴漢の動きはテコンドーだった。福田は気を失ったから見てないだろうけど、ボクは三人を相手にした。結局は多勢に無勢だったけど、そいつらの動きはテコンドーだ。学生時代にテコンドー出身のやつとは何度も対戦してるから感覚的にわかるんだ」

「それから判断すると、偽装襲撃の実行犯は北嶺観光開発の社員という可能性がある。長嶺は北嶺観光開発を立ちあげるとき、韓国系や朝鮮系の二世や三世の人間を集めたようだからな……彼らが長嶺とともに動いているのは、長嶺が意図する南北朝鮮の統一がキーワードになっているのかもしれない」

「統一はあの半島の人たちの悲願だからね。長嶺会長が描いた構図では、東アジア政経連合構想の新エネルギー生産基地は北朝鮮だろう？ そうなったときのために、今から北朝鮮に送り込む人材を育成しておく必要があるしね」

そのあと則尾は深い溜息をつき、ふいに店の御品書をめくった。

「ねえ、このスズキの洗いの茶漬けつてのを頼まない？ どんなものか食ってみたいな」

則尾らしい、場の空気を無視した豹変ぶりである。

「好きにしろよ。ただし頼むなら3人前だ」

福田は啞然と応え、そのあと「まったくこいつは」と舌打ちした。

「大前くん、いいにくいことなんだが……」

追加の注文を聞いた仲居が廊下に消えたのを見はからい、福田が神妙に口を開いた。

「今日の話の内容は秘密にしておいてくれないか。とくに竹崎社長の妹には……」

「え？」

「竹崎由布子は今回の事件の軸にいる長嶺の愛人だ。キミも感じていると思うが、その妹にも長嶺の息がおよんできると考えるのがスジだ」

「オレには、そこまでのスジは読めないですけど……」

「気分を害したのなら謝るが、これは非常に重要なことなんだよ。つまりだな……」

福田はあとの言葉をのみこみ、思案げに腕を組んだ。

《彼女はなにも知らないんだ》

雅人は心のなかで七海を擁護していた。

二日前、美悠は『心の暗部がある』と警告のようなことをいった。たしかに七海には謎めいた部分がある。しかし、まだ数回しか逢っていない相手なら誰しもそうではないか。それを今回の事件の裏に結びつけるのはこじつけだと、酩酊した頭で懸命に考えた。

やがて福田は、気持ちを固めたように鋭い目で雅人を凝視した。

「大前くん、これはまだ可能性の段階だが、カシオペアの事件、あの被害者がCIAの要員だと仮定したら、あんなにも簡単に毒入りのコーヒーを飲むはずがない。そう考えると、警戒されずに被害者へ近づけた人物を想定せざるを得ない」

「それが彼女だっていうんですか……」

「姉の竹崎由布子という可能性もあるが、妹だって無色じゃない」

「そんなこと……」

必死に抗弁する雅人を諭すように、則尾が表情を和らげていった。

「あくまでも可能性のひとつだよ。たしかにえげつない想定だけどね。竹崎由布子がボク

らに札幌のホテルを提供したのだって、こちらの動きを探る意味があったのかもしれないし、その筋書きに妹が絡んでいないとは断言できない。反対に妹はまったく知らずに、姉に利用されているという可能性もある」

「……」

「だからね、現段階ではこちらの情報を漏らす必要もないってことだよ。大前くんが彼女とつきあうのは自由さ。でも、その可能性も頭に入れておいたほうがいい」

そのとき扉に仲居の声がして話が中断した。

雅人は仲居がいそいそと配る沈金蒔絵のお碗を呆然と見つめた。

密かに夢想していた七海との関係……明るく輝く水平線のような未来に不吉な暗雲がむくむくと広がる気がした。